

<今日の説教のポイント ヨハネによる福音書1章19～28節 >

1 「洗礼者ヨハネの証しを聞きなさい」という言葉に従おう。

この福音書が、「イエス・キリストの真理を洗礼者ヨハネの証しに聞きなさい」と語りかけているのは明らかです(1:6-8, 15)。神様がそのような方法を取られたのですから、私たちはそれに従って考えるのであり、そうする時に私たちの理解を超えた神様の真理を分かっていただけるのです(聖霊なる神様が働くとはそういう意味です)。

2 ヨハネが否定する「メシア、エリヤ、あの預言者」とは？

ここでヨハネが強調していることは、19-21 節では、「自分はメシア、エリヤ、あの預言者ではない」ということです。メシアとは旧約の神の民が待ち望む救い主であり(旧約のヘブル語、新約のギリシア語ではキリスト)、エリヤは彼らが再来を期待した預言者であり(マラキ書 3:23)、「あの預言者」とはそのような期待の出所であるモーセが語った言葉から来ています(申命記 18:15, 18)。次に 22-23 節では、イザヤ書の言葉(40:3)を用いて、「イエスがメシアであり、自分はそれを伝え、消えて行く声に過ぎない」ということを強調しています。私たちはこれらのことから何を聞き取り、自分たちの信仰に反映させていけばいいのでしょうか。次にそれを考えたいと思います。

3 「キリストが大事。自分は消えてもいい」と思える時とは？

この福音書が書かれた当時、洗礼者ヨハネを崇める人々がいました。彼らは結局イエス様の大切さが分かっていたいかなかったのです。一方、洗礼者ヨハネは「イエス様が大事」ということが本当に分かっているから、崇められても「自分はそんな者ではない。自分は消えていいのだ」と言えたのです。それは彼がこの大事なお方を指し示す役割に満足していたからです。これは、私たちもイエス・キリストを思いながら生きる時に持てる大きな幸いです。しかし、それを忘れてキリストが視界から消えてしまい、自分が重んじられているかを気にし、用いられると満足し、そうでないと落ち込んだり人を恨んだりするようになることがあります。罪に支配されている時の姿です。しかしそんな時こそ再び主イエスを思い出し、自分の愚かさに気づき直し、赦されて生かされている恵みを深く覚え直して、また新たな思いで生きていける幸いの時とすることもできるのです。感謝しかありません。